

佳作

『Aではない君と』 薬丸岳著

情報コミュニケーション学部 2年 川上湧太郎

もしも、我が子が殺人を犯したら。

主人公である吉永圭一は、仕事に恋愛に、充実した日々を送っていた。しかし、ある事件をきっかけにその平和な日常は崩壊する。離婚した妻と暮らしている 14 歳の息子・翼が、クラスメートを殺した疑いで逮捕された。吉永は、動揺をおさえきれぬまま翼と面会するが、翼は一向に事件について語ろうとしない。息子は、「容疑者 A」となった。

本作品はミステリー要素が強く、事件の真相を予想しながら読み進めることも楽しめる。だが、この作品の特筆すべき点は、真相究明の先にある。どのような手段で殺したのか。なぜ殺そうと思いついたのか。それは物語が進むにつれて徐々に明らかにされる。だが、問題はその後だ。被害者の遺族とどう向きあうか。そして、「殺人者」という消えない烙印を背負って生きる息子とどう向きあうか。この答えなき問題について、あくまで冷静かつ真摯な筆致で書ききったこの作品には、間然する所がない。

事件の調査が進み、翼が被害者から壮絶ないじめを受けていたことが判明する。面会時、翼はある問いを吉永に突きつける。「ぼくはあいつに心を殺されたんだ。それでも殺しちゃいけないの？」。

「心とからだど、どっちを殺したほうが悪いの？」。私には分からない。ただ、どちらもひどく耐え難い苦しみであることは間違いない。被害者の遺族の台詞が胸に突き刺さる。「息子の言葉が聞いた。生きてさえいてくれば、過ちを反省させることも、これからの息子の人生に寄り添うこともできた」。

物語の最後、少年院をでた翼は、父の吉永と共に遺族のもとを訪れる。遺族の深い悲しみを理解した翼は、涙を流して謝罪する。吉永は、そんな翼に寄り添い生きていくことを決意する。人を殺してしまったという事実は決して消えない。死んだ人は二度と生き返らない。私は、殺人やいじめを許そうというわけではない。しかし、消えない傷をかかえつつも必死に生きようとする彼らに、心から応援を送らざるにはられない。

さて、私達の家族はどうだろう。犯罪に関係するかはともかく、皆なにかしらの問題を抱えているものではないか。家族の誰かが、過ちを犯す時もあるだろう。そんな時、どうすればよいか。過ちを犯した時、やってしまった事を非難するのではなく、まずは何故やってしまったかを理解し、苦しみを受け入れようとする。それが人に寄り添うということではないか。「物事のよし悪しとは別に、子どもがどうしてそんなことをしたのかを考えるのが親だ」。吉永が翼と向き合おうと決意するきっかけとなった、彼の父の言葉だ。苦楽を共にする大切な人がいる人に、この本を是非手に取ってほしい。